アジア・太平洋研究センター主催，総合政策学部共催講演会

日　時：2021 年 9 月 29 日（水）
場　所：南山大学　オンライン講演会
テーマ：ミャンマーの国家と社会：クーデター前後の展開に注目して
報告者：長田　紀之（日本貿易振興機構アジア経済研究所地域研究センター副主任研究員）

ミャンマーでは，2021 年 2 月の選挙にてアウンサン・スーチー率いる国民民主連盟（NLD）が勝利したものの，直後に軍によるクーデターが起こった。その背景と現状について，ミャンマー・ビルマの政治史，都市社会史をご専門とし，現下の政治状況についても多数の論考を発表しておられる長田紀之氏に，「ミャンマーの国家と社会」とのタイトルでお話しいただいた。以下，概要を報告する。

ミャンマーは ASEAN の西北端に位置し，タイとラオスと国境を接しているが，実はそれとほぼ同等の長さの国境を中国とインドともそれぞれ接している。緯度的にもミャンマーの北半分は東南アジアのカテゴリーには馴染みにくく，ミャンマーは東アジア，東南アジア，南アジアの間に存在する。

面積は日本の二倍近く，人口は 5 千万を超える。季節という観点からみると，雨季（5 ～ 10 月），涼季（10 ～ 2 月），暑季（2 ～ 5 月）に分けられ，地域という観点からは北から南に中央部を流れるエーヤーワディー川を中心に東北西の三方の山に囲まれ，南はエーヤーワディー川の大規模な三角州となっている。地域的には，山地，平地（中央の乾燥平原とデルタ），沿岸部（ベンガル湾からアンダマン海に面する地域）に分けられる。歴代王朝が拠点をおいてきた地域は中央の乾燥平原であるが，近世になりデルタ地帯が米作を中心に開発され，その中心がヤンゴンである。

民族的には，多数派のビルマ民族が平地に，その他の主要民族としてはカチンやシャンなどが山地を中心に暮らしており，公称では 135 の民族が存在する。言語も非常に多様であり，また宗教も，上座仏教が多数派であるが，イスラーム，キリスト教徒も少なくない。

19 世紀末に英領に組み込まれて以降の近世ビルマに触れておくと，1948 年に独立するが，それから 1962 年までは議会制民主主義を採用していたが，いわば内戦に近い時代である。なお独立に中心的な役割を果たしたのがアウンサン将軍であるが（アウンサン・スーチーの父），独立直前に暗殺されている。1962 年からは社会主義軍政期が 1988 年まで続き，1988 年の世界的な民主化運動のなかで，ミャンマーでも移行経済軍政の時代に入り，2011 年までこれが続いている。つまり，半世紀にわたる軍

事政権下にあり，1990年代以降は，民主化を抑圧したという評価により欧米による経済制裁が科され，ベトナムなどにも経済的に後れを取っていく。そのため，民政移管を進めることとなり，2008年憲法が制定され，2010年に総選挙が行われた。

ただし，2008年憲法は，国軍が国会議員の三分の一の議席と，主要大臣についての任命権限をもち，また国軍は文民統制を受けない仕組みを定めるものであった。それゆえ，アウンサン・スーチー率いるNLDは2010年の総選挙をボイコットし，軍ナンバー4のテインセインが軍服を脱いで率いた，国軍の影響下にある連邦団結発展党が政権を担う，括弧つきの民主化政権であった。

2015年の総選挙では，アウンサン・スーチー率いるNLDが過半数議席を獲得して勝利し，政権を担当するところとなった。多くの期待を背負っての船出となったが，民主化という観点からは制約のある2008年憲法のもとで，国軍との緊張関係を伴い，任期後半には，少数民族問題やロヒンギャ問題などについても国軍や支持基盤のビルマ系の世論の動向を無視できず，またより民主的な憲法への改正の動きも国軍との関係でとん挫し，行き詰まりをみせていた。ただし，経済的には，東南アジア最後のフロンティアとして外国直接投資なども2010年代を通じて流入し，また規制緩和も進み，若干の停滞もみられたものの，基本的には成長基調にあった。

このようななかで実施された2020年11月の総選挙では，NLDが再び圧勝した。これに対して国軍は，不正選挙であると主張し，最終的に2月にクーデターに踏み切った。国軍側は政権掌握の正当性を主張し，統治の既成事実化とともに，経済回復や少数民族との停戦和平に注力し，総選挙をやり直すことを主張している。NLDを排した形での民政復活を考えているのではないかと推測される。

国軍側の誤算は，抗議運動の拡大である。若い世代がインターネットなどを通じたアピールを行い，SNS等の呼びかけでデモも広がった。また，医療従事者や教員，鉄道員など市民的不服従運動というボイコットも行われた。軍による暴力的な弾圧によりこうした反対運動は次第に困難になっているが，それでもさまざまな形での抗議や抵抗が続いている。この反対運動では，仏教の慣習に基づく覆鉢という示威（托鉢に応じることは徳を積むということだが，托鉢を拒否するという形で政権にNoを突き付ける）や女性用ロンヂーを吊るして国軍に対抗する（その下をくぐることはやはり徳を失うという俗信），というような工夫もみられる。いまだ混乱が続いているが，こうした運動は，単にクーデター前への復帰のみならず，新しい未来を展望した運動の萌芽とみなしうるのか，今なお予断を許さない状況にある。

以上のような発表に対して，ミャンマーの地理的，文化的，歴史的な背景に関する質問や，ロヒンギャ問題とNLD政権の対応とさらにそれに対するクーデターと軍政との関係についての質問など，活発な質疑応答が行われた。

（文責：佐藤　創）